

に、フランス語を選択したからだったそう。

そんな高橋さんはフランス語を日本語に翻訳する上で、「文法構造の違いやフランス語独特の表現方法に苦勞する」と話す。しかしその反面、辞書には載っていない概念を日本語で正確に合わせる事ができた時は、やりがいを感じるそう。高橋さんは文章に書いていない概念を読み取るこの作業を「行間を読む」と表現した。「1行1行の間の深みをどこまで読み取れるか」が翻訳での大切な作業だと言う。それが好きで30年間この仕事をやってこれたそう。 「もちろん読者にいいと言われたときもやりがいを感じるが、本は売れる売れないではない」とも話した。

高橋さんが翻訳する本の中で一番多く目立つのが、『パスカル・キニヤール』というフランスの作家の作品だ。彼の本に惚れ込んで、フランスに行く度に彼に会い、話をしているそう。キニヤール氏に惹かれた理由を「思いがけない巡り合わせがあった」と高橋さんは語ってくれた。高橋さんは昔からある詩人が

好きだった。そして実はキニヤール氏の父親が、その詩人の研究家だったことが、彼との会話でわかったそう。キニヤール氏の家の壁にはその詩人の多くの作品が飾られており、彼は幼い頃からその作品に触れていたのだ。それがキニヤール氏の作家活動にも少なからず影響を与えていたはず。それ故、高橋さんは自然と彼の作品にも引き込まれたのではないかと話した。

翻訳にかかる時間は、若い頃と今とはピッチは大分ゆっくりになったという。翻訳は1日8時間もやるとおかしくなるというほどハードな作業だそうで、「今はそんな体力はない」と笑って話した。

人生は決められない

高橋さんは彼自身の人生経験から、高校生の内に大学や就職のことなど、自分の人生がわからなくて決められないのは当たり前だという。会社勤めを辞め、安定した生活を自ら手放し、後悔したことは何度もあったが、今思うとその選択は間違っていないと高橋さんは話

す。「自分自身のことは自分が一番理解しているというのは一番の嘘で、人生は長い時間をかけて試行錯誤しなければならぬ」と熱く語ってくれた。そして、「最初はつまらなくても、長く続けていけば楽しくなることもある」「何か一つのことをやり続けなさい」と私たちにメッセージを送ってくれた。

取材を終えて

取材の後、高橋さんの好きなフランス語を伺い、二つ教えてくれた内の一つが「Bon Vivant」である。「ボンヴィヴァン」と読むこの言葉は辞書には「楽道家・美食家」と載っている。しかし高橋さんは「人



高橋さんを囲んで



『幸福はどこにあるか』ワ・フランソワ／ルー・ルシェ 著

精神科医ヘクターは、彼の患者を幸福にすることができないと悩んでいた。そこで彼は旅をして幸福とは何かを調べることにする。世界各地を巡り、友人に会い、現地の人と話し、彼が見つけた幸福とは？

皆さんは今自分は幸福だと感じているだろうか。裕福な人が必ずしも幸せだと感じているわけではない現代で、どうしたら幸せだと思えるのか。この本には皆さんを助けるヒントが散りばめられている。

生を楽しむ、あるいは愛する人というニュアンスがある」と話す。人生は辛いことや苦しいことも一杯あるが、「自分の持つ手や知恵を使い、自分が納得する生活をする事が出来る人」を指す言葉だと教えてくれた。 今回の取材は、時間を忘れるほど充実したものであった。今回、偉大な先輩と話す時間を持てたことに感謝したい。